



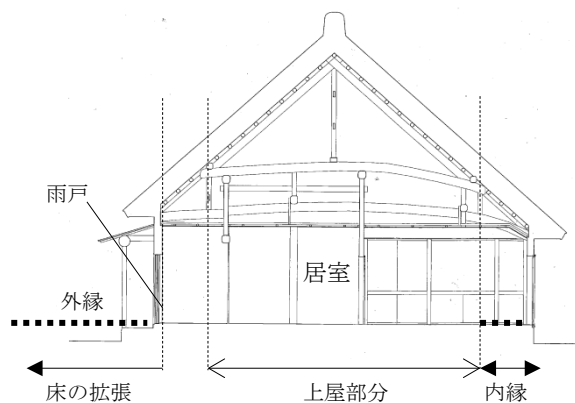
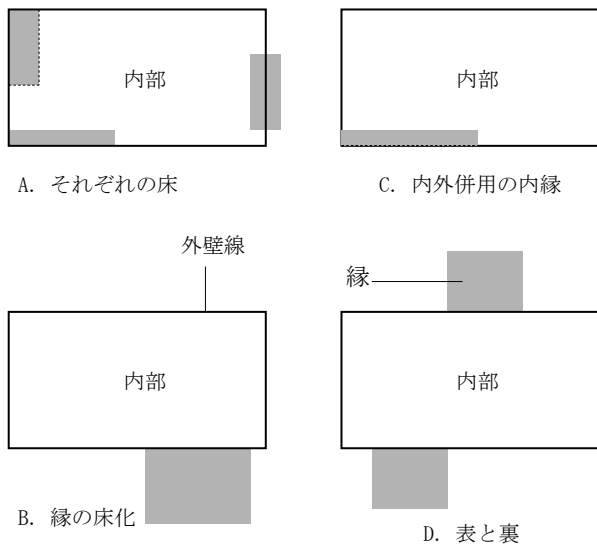
桂離宮古書院の「広縁」と月見台※



改修時に付加された台所裏の広縁



改修された外縁



《民家構造と縁》

縁の位置は既存建物の構造に拘束される。上図は江戸中期の古民家の場合である。縁は上屋の内側まで入り込むことはなく、その外側ないしは外壁より外に設けられる。

●縁がわ／縁

縁がわは内外を分節する境界にしつらえられた床座の機能をもつ。雨戸等の内側にあるものを内縁、外側にあるものを外縁（濡れ縁）といい、総称的に縁がわと呼んでいる。時代を遡ると「桂離宮」のような上層階級の建築では、部屋の周りを内縁で囲い、さらに月見台など宴の機能を兼ねた大きい外縁もある。一般の民家に縁側が普及した時期は地域性や市中と農山漁村との違いもあり特定できないが、現在の房総の伝統民家にはほとんど「縁」と「土間」が併存する。「縁」は近隣との付き合いを含め、多種多様な使い方ができるが、概して地縁的なつながりが低い都市部の住宅では、家族専用の使い方が主となる。「縁」は工事区分上は外構工事に属するが、ライフスタイルの変化や若い世代の動向などをふまえ、リフォーム工事とも無縁ではなく、設計上の付加機能として有効性があると判断した。

●縁の効果

縁側とライフスタイルの関係性を4つの視点から設定した。

- A. それぞれの床／家族の個人単位の使い方や多様な生活利便性等を図る縁の機能。
- B. 縁の居間化／居間の開放感やだんらん機能など一部屋に相当する程の広さを確保した外縁（デッキ）
- C. 内外併用の内縁／多くの伝統的民家にみられる縁側。通常サッシ等で仕切られた内側に取り込まれている。
- D. 表と裏／表と裏の意味は日当たりの条件や家構えの正面と裏面、玄関と勝手口等の対立的条件を想定している。また民家の床の高さが地表から70cm程の場合もあり、高さ調整を含め、機能面での効果を見直したい。

※「桂離宮御殿整備記録」 宮内庁（1984）

●材種と仕様

近年普及しているデッキ材は、東南アジアなどからの堅い材種の輸入品が多い。国産材に比べ耐朽性が高く、屋外での土足の摩耗に強い点も評価されている。雨ざらしの条件下では、国産材は、耐久性の点で不利ではある。ただ輸入品は甚硬のため手加工での調整がしにくい点がある。

材料	比重	加工	耐久性	素足	コスト	調達
ウリン	1.04	難	20年	△	100	海外
イペ	1.07	難	20年	△	100	
マサラン	0.93	難	20年	△	80	
ひのき	0.41	良	15年	◎	75	国内
こうやまき	0.42	良	15年	◎	80	
けやき	0.62	中	15年	◎	80	

輸入品は高耐久ではあるが、コストは材・工を合算すると国内産よりも高価になる。土足に耐えられるが住宅での素足での感触は硬くやや難がある。通常、真夏日の直射による木材の表面温度は、気乾比重が高いほど高温化するが、どの材も素足では不適となる。

なお工業製品のデッキ材には、プラスチック等を合成した高耐久複合材やリサイクル可能な製品が開発されている。上記表の材料コストは流動性が高いウリンを基準値100とし概略の目安を記した。

【指針】コスト面等を比較し、国産ヒノキ材も可能な範囲と考える。通常、腐朽は繊維方向に進むので、比較的長尺材を選定し、板材を裏（下面）から吸いつき棧で一体化し、同種の大引きなどに固定する。